

その2 高津の女人信仰の民俗 - 子安講・秩父参り・念仏講・観音堂のすがた

藤 由美

1 はじめに一姫神の霊宿る高津から

旧村高津は、姫神の霊の宿る里である。

はるか古代、都からこの地に下った藤原時平の息女高津姫の流離譚にいろどられた伝説が寺院やお堂、産土の社に息づき、神仏への信仰を通しての旧村のコミュニティの活動が今なお盛んな地域である。

高津姫の守り本尊を祭るという観音堂、高津山観音寺、産土の高津比咩神社を中心にムラにはさまざまな講やツジキリなどの民俗行事が継承されているが、特に2004年、高津比咩神社が参加する「下総三山の七年祭り」は千葉県指定文化財に、「高津のハツカビシャ」は八千代市指定文化財にもなった。

三山の七年祭りは、馬加城城主康胤の安産祈願の故事にならって近隣9神社の神輿が三山に集い、七年に一回、高津もその心意気が燃える祭りである。

これらのムラの行事を支えるのは、4つの「ニワ」に分けられた地域ごとの当番と、男女別、年齢階層別の祭礼の氏子組織や講である。

七年祭実行委員会に結集するダンナ衆の結束力は日ごろから強く、その跡取りである青年層は八千代市消防団第5分団メンバーとして通常から活動し、祭りに際してはダンナ衆とは自立した「若衆組」となる。

一方女性たちにおいては、若い主婦・母親世代では「子安講」に、また高年齢の元気なおばあさん方では「念仏講」に集い、これらの講は今なお伝統的なムラづきあいと懇親を深める場となっている。

そのほか、秩父坂東・奥州・富士・御岳・吉橋大師・相馬大師などの巡拝を目的とするさまざまな講がこの旧村にはあるのだが、今回のレポートは高津の「子安講」の取材と念仏講のおばあさま方からの聞き取りと、観音堂のたたずまい、絵馬、奉納記念写真などから高津の女人信仰とその変遷を探っていきたいと思う。

2 子供の健やかな成長を祈って

2003年12月、小春日和の静かな高津比咩神社の境内を、その年の七年祭で山車の組み立て場所と休憩所となったデンニム家のご家族が新生児の初宮参りにみえていた。七年祭で若衆として活躍し、この度父親となったばかりの息子さんと、被布をまとって初孫を抱いたデンニム家の奥様を先頭に、赤子の母親であるお嫁さんとその親一同そろって神社本殿を拝礼(写真1)し、そのあと、息子さんが、袋からお米を一掴み奉納する。続いて、境内の御岳社など末社9社全てに拝礼し、お米の奉納をして廻る。三峰神社石碑だけは、



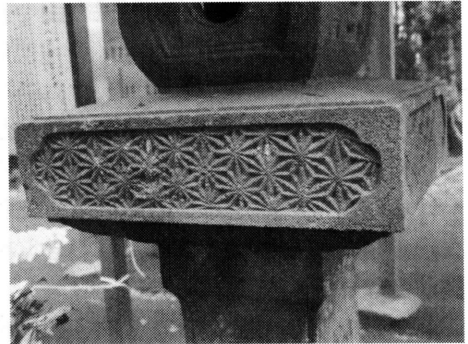
1 高津比咩神社への初宮参り

女人禁制で男性だけのお参りで、ほかの7社は全員での拝礼であった。

この時は神主さんも常駐ではなく、身内だけの簡素なお参りであったが、高津比咩神社は、姫神（多岐津姫）が祭神であり、高津の産土であることから、氏子にとってまずは初宮参りを始め、子供の健やかな成長を祈願することは当たり前のことでもあり、産土への信仰と慣しが生活の一部となっている光景であった。

かつて、女性にとっては出産と子育てはたいへんな苦勞を伴うものであり、特に乳幼児の死亡率は高く、「七歳までは神のうち」として初宮参りから始まって、高津ではミツメの祝や初節句の行われる家へ念仏講の婦人たちが「ハナミ」の祝歌を唱和しに出むき、各イエだけでなく、ムラのコミュニティ中でも子の成長を祈願してきた。

高津比咩神社の灯籠に何気なく刻まれた地紋は、麻の葉のデザイン。（写真2）麻のようにたくましく育ってほしいと願って、産着に使われる模様である。こんなところにも子供の成長に寄せる村人の心がほのかに表れている。



2 高津比咩神社の灯籠

3 現在の高津の子安講

高津の旧家の結婚した女性たちは現在も、観音寺本堂に毎月19日に集まって「子安講」を開く。月待講である十九夜講に由来する19日の開催日は、他地区のように週末に移動させることなく、今も伝統が受け継がれている。

2005年2月19日に開かれた子安講に私も参加させていただいたが、当日は28人の講のメンバーのうち18名が参加し、子供連れの参加もあってなごやかな雰囲気の中で講が開かれていた。

あいにくの氷雨の降る日であったが、正午ごろ、集まった参加者は最初に昭和59年に境内に建立された「水子地蔵」に参拝（写真3）してから、本堂右陣の昼食の席につく。その日は午前中から4名の当番が3升の米に鶏肉をしょうゆ味で炊きこんだ鳥飯をつくる。これは昔からのメニューで、そのほか昨今は、漬物、具がたくさんの味噌汁、コロッケ、付け合せの生野菜とだいたい決まっている。子安講名物の鳥飯は、食べきれないので、残った分はお土産となる。



3 「水子地蔵」に参詣



4 子安講の枡

会費は月 500 円、それに、枡にいっぱいのお米をあらかじめ集めておく。2 個ある年季の入った 3 合強ほど入る枡（写真 4）は、「昭和三十二年三月十七日 子安講」の墨書があり、今も大切にされている。

食事が終わると、世話人さんが事務連絡をしていた。この日は、翌月の春休みに坂東 33 観音霊場巡礼の手続きや、納経帳の整理に世話人さんは余念がない。団体でスムーズの納経を済ませ、効率よく廻るためには、あらかじめ綴り式になっている各自の納経帳を集め、集印用紙を各札所に送っておくのだ。

数年～十年ぐらいの間隔で行われる秩父巡礼は、女性が一生に 1 回行くことになっていて、子安講を卒業し中年を過ぎて余裕もできたころから、「秩父参り」に参加することが多かったが、現在は、子安講から秩父や坂東観音霊場巡礼に参加することは珍しい。

ヨメを迎えて子安講を卒業すると、しばらくして念仏講に誘われる時代もあったが、現在は念仏講に入る人はほとんどなく、子育てが終わってもそのままとどまることもあり、また最近では中年講に入る人もいる。中年講は、高津比咩神社の前の自治会館で毎月最終日曜日に集まっているが、「拝む」ことなど民俗宗教的なことはない。

高津の子安講では、現在は 33 年に 1 回、子安講の供養塔を建てることと決めているとのこと。毎月集金する 500 円の講費から「イシダテ」の費用を積み立てている。前回は、1982 年（昭和 57）だったので、次回は 2014 年となる。

さて子安講のほうは、食後のおしゃべりが一段落すると、「そろそろ拝みましょうか」といって、一同本堂内陣に移動し、本尊の十一面観音の前に正座して、「子安講のハナミ」を美しいコーラスでゆっくりと唱和する。（写真 5）「拝んだ」あとは、また卓を囲み、ケーキなどお茶菓子をいただきながら、懇親を深めるというのが、現在の子安講に姿であった。



5 「子安講のハナミ」を唱和

- 一、めでたやな これのおざしき ところよろこぶ はばをとる
なにごとにかきとるように ひとのもちいのあるように
ひとのもちいのあるように
- 二、このむらのあねさまがたは どこへまいるか おそろいで
みをきよめ かみを清めて 子安様へと ごさんけいに
子安様へと ごさんけいに
- 三、このむらのあねさまがたは やなぎだるをひきさげて
まずをはつを 子安様へ あとはおざえとひろめする
あとはおざえとひろめする

4 秩父・坂東観音霊場巡礼今昔

高津の女性たちは、一生に1回、秩父34ヶ所観音霊場巡礼に参加した。数年から十年ぐらいのサイクルで団体巡礼が企画され、その際の機会をなるべく逃さないよう心がける。同行の仲間は「組」とよばれ、一生のおつきあいとなることも多い。

秩父巡礼は2泊3日の行程を貸し切りバスで、坂東33ヶ所観音霊場は1泊2日で廻るが、坂東は範囲が広いので3年で一巡する。2005年は坂東の2年目で春休み中の3月25～26日に廻る準備をしていた。今回は18名参加の申し込みがあり、一人38000円ほどの費用を負担する。

女性なら年齢にかかわらず誰でも参加できるが、かつては旅費もかかるので、小遣いを貯めたり、息子にヨメをむかえてシュウトになってから行かせてもらったとも。また息子が兵隊に行くイエの人は、無事帰ってくるよう、必ず参加したとのこと。

昔は、和服にそろいの道行きコートを着て手ぬぐいをかけ、ついでに三峰や佐渡へ足を延ばしたこともあったらしい。「ハダシタビ」（地下足袋）や「わらざうり」を履いていったこともあったとか。イヘイさんのおばあさんのお話では、途中でわらざうりの後が切れて道の石を跳ねてしまい、その石が着物の長いたもとに入って重かったという笑い話もあった。

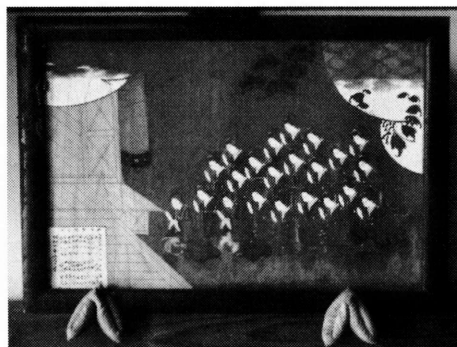
またしばらく前までは普段着に袖なしの白衣をはおったりしていたが、現在では歩きやすい普段着の上に紺や赤、緑の輪袈裟をかけるだけの姿で、また観音経と般若心経の経本を持参する。先達は昔から男性で、鈴木信司氏が、ここ毎回勤めてくださっている。

同じく男性が一生に一回の出羽三山を巡る「奥州参り」の後には、記念の供養塔を建てる慣しがあるが、女性の秩父・坂東巡礼では建てたことはない。

そのかわり、観音堂の中には向かって左の壁の上に、昭和四年（1929）五月十五日銘のりっぱな秩父参拝絵馬が奉納されている。島田髷を結って紋付の正装をした女性20人とザンギリ頭の先達2人が祈る姿が描かれて、左下に先達2人女性20名同行者の名前が記載されている。（写真6）

現在は、秩父・坂東巡礼の記念写真を額に入れて観音堂の右壁の鴨居の上に飾っている。高津比咩神社の拝殿内にも巡礼の写真と女人祈願図の絵馬があるが、観音堂内で一番古いのは、昭和25年（年号の記載はなし）の女性23名の写真で、参加者名は屋号。全員和服にそろいの道行きを着て手ぬぐいを首に掛け、下駄履き姿である。このときは佐倉駅の駅長さんが事前からいろいろ世話をしてくださり、佐倉駅から巡礼専用列車で秩父に向かったと参加したイヘイさんのおばあさんがお話してくれた。

次は、昭和38年4月20日16名、続いて昭和43年4月15日25名の写真で全員和服。昭和49年3月29日27名の写真は、雪の残る秩父13番慈眼寺での撮影、このころから洋装となっている。以上、いずれも先達は1名である。



6 昭和四年銘の秩父参拝絵馬

それ以降はしばらく間をおいて、平成 13 年 3 月 25 日 21 名（内男性 1 名）、秩父札所 24 番法泉寺でのカラー写真となる。その十年ぐらい前（平成の初めごろ？）と見られる 36 名のカラー写真は、高津に帰ってから、袖なしの白衣を着けて観音堂の前で撮った写真。また昨平成 14 年 3 月 10 日 25 名参加の坂東三十三観音巡りの写真も帰ってから観音堂での撮影である。

4 月と 8 月の観音のオコモリに集まった念仏講のおばあさんがたは、写真を見ながら他界した同じ組の仲間のことも懐かしく思いだしつつ、秩父の話に花を咲かせる。秩父巡礼は、女性の人生経験の中で大きなイベントであったようである。

5 「畑の子安様」、富士講、「市川的地蔵様」への安産子育て祈願

〈畑の子安様〉

女性だけの参拝先としては、秩父・坂東のほか、近隣では 5 月 7 日にお参りする「畑の子安様」がある。

畑の子安神社は、「子安神社御由緒」によると、「延暦年間子安古墳のお山を御神体として五穀豊穡の神として創立され、延喜年間奇稻田姫命を勧請し子安大明神として祀る」という。また建久 3 年に千葉常胤の息女が懐妊し、産月に至っても臨産の気配がなかったため、子安大明神に安産祈願を行ったところ、産気づき安産されたと伝説があり、馬加康胤所縁の三山の七年祭で妻の役割で参加している。

下総では、子育ての稲毛浅間神社とともに、安産祈願の子安様として、遠方からの参拝が多く、5 月 7 日の安産子育て講社祭は、各地からの子安講の参拝でにぎわう。子安神社が安産祈願して下賜する岩田帯も妊婦が 5 ヶ月目の戌の日に着ける帯として有名で、皇室への献上も栄誉として神社に伝わっている。

また神社境内には、子安観音と子安地蔵の石像も小さなお堂の中に安置されていて、お参りにくる人も多い。（写真 7）

〈富士講と浅間様〉

「富士講」もまた子安信仰と密接な講である。富士山の祭神、木花佐久耶毘売命は山の神、大山祇神の娘で、ニニギノミコトに姉の石長姫とともに嫁した女神である。木花佐久耶毘売命は一日にして子を孕み、その身の潔白を証明するために産室に火を放って子を産んだことから、火の神や安産の神、子育ての神などとして信仰を集めている。



7 畑の子安観音と子安地蔵

富士登山には体力が必要なので 30 ～ 40 歳ぐらいが多いが、高津でも、現在も老若男女誰でも体力があれば参加でき、お父さんの代わりに中学生が参加することもあった。八合目と熱海で 2 泊の 3 日の行程で、山ではよそ見をすると「山酔い」といわれ、ひたすら登ったとか。

昔、講の先達をしていたシチゼムさんの家には、中に掛け軸が入っている「富士講の

オハコ」を持っていて、富士登山の際は、誰かが借りてきて掛け軸に判をもらってきたという。

念仏講のおばあさん方のお話では、正月3日に講の人が集まり、「オハコ」を開けて拝む。赤い傘もあったとか。箱を縛ってある紐はお産の時の腹帯にし、安産すると新しい紐を返す慣わしがあったというが、現在のご当主は覚えがないというから、ずいぶん昔のことだったらしい。

稲毛の浅間神社には、イエの惣領の初子が7歳ぐらいになると、家族で7月15日の縁日にお参りに行った。お祝いをいただいた親戚縁者に、お札と桃と団扇を土産に買って帰り配ったというのは、高津新田など近隣の地域と同じである。

〈市川の地蔵さま〉

また「市川の地蔵様」も、安産子安のご利益があり、世話人のキンニムさんが代参していた。「市川の地蔵様」は、「安産子安の時間の地蔵さま」として、都合のよい時間にお産が無事できることがご利益の明王山根本寺のことで、現在の国府台5丁目に移転する前は、国府台駅の近くにあった。毎年4月12日～15日の大祭には、地蔵講の婦人たちが各地から今でも大勢集まる。（「郷土史研通信」平成15年7月号、「史談八千代」28号9-5）

6 観音堂と念仏講にみる信仰世界

高津の女人信仰を語る際、現在もその中核となっているのが、「史談八千代」第29号の成瀬の報告「7高津比咩神社晦日のおこもり」にある念仏講のおばあさん達である。

現在20数名の講員が、毎月晦日は神社でのおこもりを行っているほか、毎月11日（1月と8月は16日）の月並念仏、新年や彼岸、盆の行事の念仏、また、子の神、弁天、ドウロクジン、大六天などムラの小さな神々の祭りなど、講員が集まって念仏や祝歌であるハナミを唱える回数は四十数回に及ぶ。（詳細は「よなもと今昔」12号）そのほか、11月9日の「九日念仏」は子安様のムラ行事で、9つの団子を供え塔婆を立てて念仏を唱える。

中でも、観音様の縁日の4月18日と8月17日は、この日だけご開帳される観音堂でおこもりする。（写真8）

念仏講の女性たちは、高津姫伝承の宿る観音堂に、ひとかたならぬ愛着をよせていて、観音様の由来や姫の墓のことなど、また秩父講の奉納写真などを見ながらともに巡礼した亡き友の思い出を語り合う場でもある。私は、年2回だけこのお堂が開かれるおこもりの雰囲気魅せられて、数年前から同席させていただき、ゆったりと流れる時間のなかで、旧村の女性たちの人生と祈りを知る貴重な機会を与えていただいた。



8 観音様の縁日4月18日の観音堂

〈観音堂の姿〉

観音堂は、船田からの谷と高津川が合流する地点の北側に広がる台地の突端に位置している。今は新田のニワに属するが、中世的な旧村落の景観としては集落のはずれで、観音堂の裏はラントウバとよばれる埋め墓である。高津は両墓制で埋め墓が、新田のこの観音堂裏と、西のニワの現在の西霊園にあった。ちなみに詣り墓であるウチラントウは今の観音寺墓地で、石塔だけが個人、のちに夫婦単位の追善供養のために建てられてきたが、近年墓地整理が進んで各家単位の現代的な納骨墓となり、西の埋め墓も平成8年に整理改葬し同様の家毎の墓となって両墓制を廃した。

観音堂裏の埋め墓は、土葬したときの塚が手入れよくきれいに並び、花や線香が常に手向けられていて、念仏講のおばあさんたちは、おこもりの前や後に、裏の墓に詣でて、かつての親しかった友人の墓に話しかけ、しばし故人を偲んだりする。(写真9)



9 観音堂裏の埋め墓にお参り

最近の葬儀では、お寺の新しい墓に納骨されるので、直接この埋め墓に埋葬することにはなくなったが、四季の花が咲き乱れる塚に観音堂が重なるその景観は今もなお、身近な人の死が自然と一体となりつつ浄土へと導かれるにふさわしいたたずまいをみせている。

観音堂は間口・奥行き3間の宝形型のお堂で、昭和30年(1955)までは茅葺きであった。(「岩井岩雄氏功績記念碑銘文」)

赤い須弥壇に江戸時代の作の像高47cmの聖観音立像が安置されている。(写真10) 建立した年月は不明であるが、厨子の中に納められた修理札によれば、安政5年(1858)に本尊の聖観音像と光背蓮台を修理し、大正4年(1915)に本堂と須弥壇などの塗替えや修理を行っている。(資料1.①②)

内陣の左右の上の壁には、天女の絵が描かれ、正面の鴨居の上には龍の絵の額が掛けられてある。

念仏講のおばあさんの話では、もとあった高津姫の守り本尊の観音様は、お堂に住み着いた乞食に盗まれて花島にほっぽられ、そのまま花島の寺のものになってしまい、今の観音様は新しいもののだとか。また、お堂右横の最近他所から移されたコクゾウさまの石祠のある塚には、ここで生涯を終えた高津姫が葬られているという。確かめようもない噂話だが、高津姫の伝説をどなたも身近に感じておられるようで、興味深い。



10 ご開帳された本尊の聖観音像

〈観音様のおこもり〉

さて、観音堂のおこもりの日、この日は朝から「新田」の二ワの4人の当番がお堂を開けて準備をする。お堂の鍵はお堂の前のサダイムさんのおじいさんが預かっていて、力仕事やお厨子の開帳をしてくださる。一通り準備がすむと、昼食をとり、皆さんが集まるのを待つ。少し前までは、皆でアカメシなどの食事をともにしていたが、講員の超高齢化で負担がたいへんとなり、当番だけの食事となった。昔のおこもりは文字通り夜の行事で、念仏や飲食のほか夏は盆踊りなどもあったという。

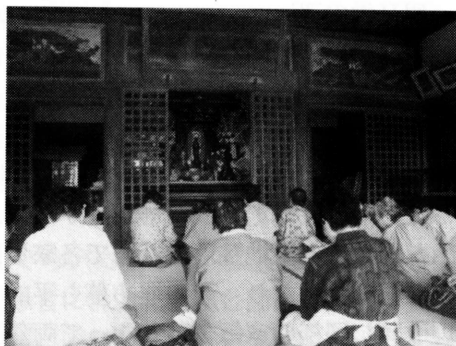
正午ごろ、講の一同が境内の大師講札所にお参りしてから、お堂の中に集まり、しばらくして観音の念仏の唱和を始める。(写真11)夏は、観音寺のご住職が来てお経をあげてくださるので、その後となる。観音の念仏は、「我借所造(ガシヤクショウゾウ)・・」、「観音の念仏」、「差し上げ」「三界万千・・」を唱える。(資料2.①②)8月は「十三仏・・」がその前に加わる。春も夏も気持ちのよい風が堂内を吹きぬける中、ゆったりとした節回しの念仏の声が流れ、現代の喧騒を忘れさせてくれる時間である。

念仏が終わると、机を出してきて飲食をしながらの懇談となる。(写真12) 献立はだんだん簡素になり、お茶と漬物、菓子などで、お土産は袋いっぱいの果物や袋菓子などが配られる。1～2時間ほどで、最後は「ごちそうさま」のハナミ唄「今日は大変ごちそうになりました ごちそうのお礼に木を植えて 金の成る木に植えてたつ 咲いたらまたあげましょう いく枝にも」を唱和して散会する。

〈死者への思いと念仏帳の世界〉

念仏講の信仰の基本は、月並念仏である。月並念仏は、「殺生地獄」「畜生地獄」「血の池地獄」など「八万地獄の苦をのがれる」ことがくり返し唱えられ、「一年十二の皆月が成就したときは、現世は無病で息災で、来世は必ず仏なり」と宣言される。

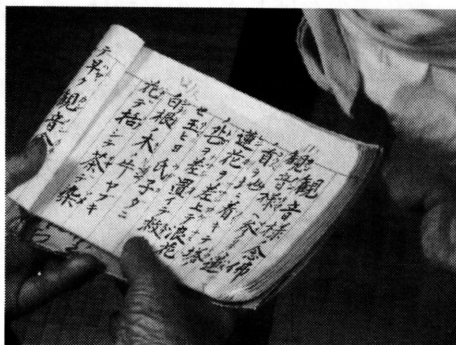
念仏はとても難しく、昔は練習がたいへんだった。それぞれ、手作りの念仏帳があり、和紙に漢字にひらがな書きまたはカタカナのものや、ノートにすべてカタカナで記したものなど



11 おこもりでの念仏



12 念仏講の懇親



13 念仏帳は人さまざま

に、節回しなどの注意点をそれぞれ記号で書き入れており、人さまざまである。(写真13)

十九夜講は、近世の中期ごろから子安講となり、安産子育て祈願に集約されるようになるが、延享や正徳期の十九夜塔には、「念仏」「二世安楽」の銘文が入っており、女人講による現世と来世の安穩を期する目的であった。考えるに現在の念仏講こそ、女人講の原点であったといえる。

念仏帳を紐解いても、安産子育てを直接祈願する念仏はない。しかし、「川施餓鬼」「若死にしたる時」「子供死にたる時」の念仏を読む時、女人ならではの死者への思い、悲しみと諦観とが伝わってくる。(資料2.③④⑤⑥)

「川施餓鬼」は、流れ灌頂のことである。念仏講のおばあさんたちの若い頃の話では、妊婦はお産で亡くなると、弁天池の脇を流れる川に、四本の竹に赤い布を結んで張り、通る人がそこにある柄杓で水をかけ、布が色あせ形もなくなるまでその方の供養をおこなっていたという。

念仏(2.④)の中の「血の池」とは、女人が生理やお産の血の穢れのため免れ得ない地獄のことで、特にお産での死は、来世も血の池地獄で苦しむと恐れられていた。如意輪観音は、その地獄で女人を救済する菩薩で、それゆえに女人講の信仰対象であった。(写真14)



14 「血の池地獄」で如意輪観音の救済

現在、女人だけが血の池地獄へ堕ちるとは、仏教の側も説いたりはしない。女人救済の利益を説いて「血盆経」を広布し、江戸時代から近代まで北総一帯の女人信仰の民俗に大きな影響力のあった我孫子市都部の正泉寺も、曹洞宗本山の指示で、「血盆経」はかえって女性を精神的に苦しめる偽経として配布をやめている。(研究目的であれば入手は可能)

現在は、中世的な女人成仏へ切実な願いも、また、医療の発達で産死や乳幼児死亡が減って、安産子育ての近世的な願望さえもがうすれつつあるが、医療や福祉の発展でも解決されない心の傷への癒しとして、流産によりこの世に生をうけなかった児への丁寧な供養が「水子地蔵」の建立などに見られるようになった。

女人信仰も時代とともに変わりゆく。高津の念仏講もあえて後継者を求めず、時代の変化にその身をゆだねようとしている昨今であるが、彼女たちの二世安楽の信仰と長寿に支えられ、今しばらくは観音堂とともにおだやかな日々が続いていくことだろう。(写真15)



15 春の観音堂

【資料】

1. 観音堂須弥檀厨子内の修理札

①安政五年観音像等修理札（写真 16） 1-16

「国土昇平 五穀豊穰

奉修補聖観世音菩薩 並 船毫光蓮臺壹式

安政五戊午年 十二月吉祥日

佛日永輝 郷中安全

世話人村役人一同

（朱書きで）信心施主家内繁昌子孫長久無災無難

高津山二十世臥雲真龍叟代（花押）

（朱書きで）山門榮昌火盜潜消衆僧無難檀信帰崇」

②（表）「天下泰平 五穀成就 佛日増輝 當村安穩

奉拝請聖観世音空殿須弥檀塗替壹式」

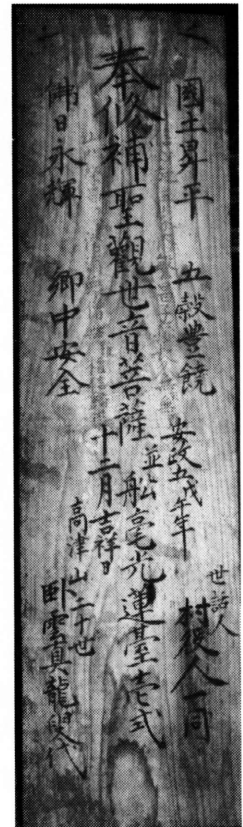
（裏）「信心發起者 江野澤善十郎 同 江野澤宗治

檀家総代 岩井佐助 鈴木弥五郎 江野澤熊治郎

江野澤 明

區長 岩井寅吉 同 江野澤 明

大正四年乙卯四月十八日入佛式 高津山二十三世勗心叟」



2. 念仏帳の内容の一部

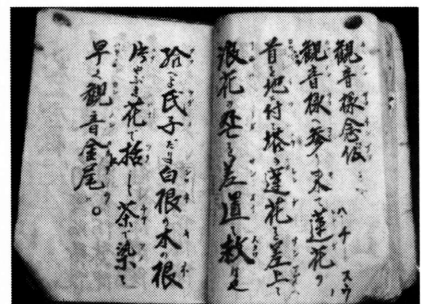
岩井吉之助氏から贈られた鈴木タケさん所蔵の念仏帳（写真 17）を原典として、岩井せんさんの念仏帳と筆者が照合し 16 安政 5 年観音像等修理札
整理した。すでに『よなもと今昔』12号と『聞き書き 八千代の女たち』『八千代市の
歴史資料編民俗』にも念仏帳の一部が紹介されており、紙面の都合で重複しない部分の
一部だけを資料として紹介する。1-17

①観音様念仏

観音様へ参り来て 蓮華の頭を地に付きて 塔の蓮華を差上げて
浪花の咎を差置いて 救わせたまえよ 氏子だに
白根の木の根片やぶき 花で括して茶で染めて
早る観音金の尾につ

②差上げ

扱ても見事な御前かな 香花燈明常立てて
あれが極楽浄土なり
我等が申した御念仏を
黄金の小盆へ積み上げて 観音様へと差上げる
お暇申していざ帰りやる
御祝御念仏 御目出度い



17. 鈴木タケさんの念仏帳

③川施餓鬼

十七が御産の紐を解き兼て 川へ下りて川施餓鬼
鬼香（キコウ）花取りて 棚へ上げ水にもまれる子安繩
その時十七浮ぶなり 十七へ御坂の宿を通る時ハ
小袖を肩に掛け 何所で干そうかこの小袖 阿弥陀の前の油光で

④同宿にて（十三仏）

血の池に浮かべし船に乗る人ハ 慈悲の菩薩で光り明か
明かな光で私を越すなれば 越されざるもの 池の船かな

⑤若死にしたる時

十七が弥陀の仏の手を掛けて 助け給へよ 弥陀様よ
助けられぬよ十七よ 娑婆に蒔いたる種ハなし
娑婆に蒔いたる種あれば 何しに弥陀様頼む可き
其こで弥陀様理につまる
極楽舟に招き寄せ 中へ十七打ち乗せて 極楽浄土へすらすらと
阿弥陀の前の蓮池に 姉子の髪と我が髪と 柄杓を曲げて柄をすえて
酌み干す程に親恋す。
白鷺が姫の小松へ巣をかけて 子を取られて 松を怨みる
白鷺が流す泪が池と為る 姫の小松が浮いて流れる

⑥子供死にたる時

十七が花の様なる子なくし 余り辛さに寺参り 寺へ参りて花見れば
開いた蓮華散りもせず 蕾し蓮華は散り落ちる
実には我が子もあの如く思いまいぞや 嘆くまい

（白鷺が姫の小松・・・）

新がし観音誰が建てた 木の根長者が御建てやる 何の為とて御建てやる
我が子の為とて御建てやる
登る導者も多けれど 我が子に似たる人はなし 思いまいぞや嘆くまい

【参考文献】（『史談八千代』は省略）

『女人哀歓 - 利根川べりの女人信仰 - 』1992 榎本正三 崙書房
「高津の信仰 - ムラ行事と念仏講のかかわり - 」1996 木原律子『よなもと今昔』12号
『八千代市の歴史 資料編 民俗』1993 八千代市史編さん委員会
「高津の念仏講を守り続けて」2004 大木めぐみ・犬塚和子・岩井由利子『聞き書き
八千代の女たち』八千代市
『八千代市の仏像』1987 八千代市文化財総合調査団